

令和元年6月25日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02364

研究課題名(和文) アイルランドのナショナル・アイデンティティ：独立戦争から紛争まで

研究課題名(英文) Irish National Identity: from the War of Independence to the Troubles in the North

研究代表者

及川 和夫 (Oikawa, Kazuo)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：50194056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：及川はトマス・ムーア、W・B・イエイツ、パトリック・カヴァナーの作品を検証し、アイルランドのナショナル・アイデンティティの変遷を検証した。ムーアは大ベスト・セラー『アイリッシュ・メロディーズ』の歌詞に巧妙にユナイテッド・アイリッシュメンへの共感を潜ませた。イエイツは「1916年のイースター」などで思索を深め、アングロ・アイリッシュとしての立場を確認した。カヴァナーは独立後の農村社会の内実を内側から描いた。

三神は映画やトム・マーフィーの演劇、カトリック教会などの分析から社会の変遷を検討した。小林はジョイスの平和主義やトマス・キルロイのブレヒト的手法にアイデンティティへの問いかけを見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

及川は研究成果をまとめて『アイルランド詩のナショナル・アイデンティティ The Harp & Green』(音羽書房 鶴見書店、2018年4月、全 +234頁)を上梓した。本書はムーア、ジェイムズ・クラレンス・マンガ、レイディ・ワイルド、サミュエル・ファーガソン、イエイツ、カヴァナー、プライアン・フリールらの作品の検討を通じて、19世紀初頭から20世紀後半までのアイリッシュ・ナショナル・アイデンティティの変遷を論じた、これまでに類書がないものである。本書は関連学会会員160名と全国41の大学図書館に寄贈した。本書はイギリス・ロマン派学会、日本イエイツ協会の研究誌で書評され、非常に高い評価を得た。

研究成果の概要(英文)：Oikawa traced the changing Irish national identity by examining the works of Thomas Moore, W.B. Yeats and Patrick Kavanagh. Some songs in Moore's huge bestseller, "Irish Melodies" secretly contain his sympathy for the United Irishmen movement. Yeats wrote "Easter 1916" and some other poems dealing with the Easter Rising. In these poems he gradually solidified his position as an Anglo-Irish Neo-Platonist. Kavanagh described the rural area in post-independent Ireland.

Mikami scrutinised the changing Irish society in such films as "Michael Collins", "The Wind that Shakes the Barley" and "Sanctuary Lamp" by Tom Murphy and the Irish Catholic church. Kobayashi argued that Joyce's pacificism and the Brechtian devices which Thomas Kilroy adopted in "Double Cross" were challenges to what had been taken as Irish National Identity.

研究分野：イギリス、アイルランド文学・文化

キーワード：アイリッシュ・ナショナル・アイデンティティ トマス・ムーア ジェイムズ・クラレンス・マンガ
サミュエル・ファーガソン W・B・イエイツ トム・マーフィー ジェイムズ・ジョイス トマス
・キルロイ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は2012～2014年度科研費基盤研究(C)「アイルランドのナショナリズム：ヤング・アイルランドから復活祭蜂起を軸として」(課題番号:24520320)代表：三神弘子、及川和夫、清水重夫(助成金額:390万円)の研究成果を発展的に継承する研究課題として位置付けられる。

2. 研究の目的

本研究では1919年からの独立戦争、1922年のアイルランド自由国の成立、その後の内戦までの国の揺籃期から、1960年代末から激化する北アイルランド紛争までの時期における、アイルランドのナショナル・アイデンティティの変遷を、詩(及川)、演劇・映画(三神)、小説(清水)の3方向から総合的に検討する。その際、前回の独立前のナショナリズム研究の成果を参照しつつ、自由国成立後の内戦、イギリスとの経済戦争による経済停滞、文学への検閲の問題、1949年の共和国への移行、北アイルランド紛争と和平への道のりなどが研究の焦点となる。

残念ながら小説担当の清水が2015年から膵臓癌の闘病生活に入り、2017年7月にご逝去されたので、2017年9月より小林広直(一橋大学日本学術院特別研究員、2018年度より東洋学園大学専任講師)が新たに研究分担者となった。

3. 研究の方法

及川(研究代表)はイエイツ、カヴァナー、ヒーニなどの詩人の作品にナショナル・アイデンティティの変遷を探る。三神(研究分担者)はニール・ジョーダンやケン・ローチの映画や、ブレンダン・ピーアンの演劇を検討し、パトリック・カルヴィンやグレアム・リードの作品に見られるひたアイルランド紛争の影響を考察する。清水(研究分担者)はジョン・マクガハン、ロディ・ドイル、セバスチャン・バリーなどの小説の分野でのナショナル・アイデンティティの変遷を追求する予定であったが、闘病生活とご逝去のため果たせず、代わって小林(研究分担者)がジェームズ・ジョイスの小説とトマス・キルロイの演劇にアイルランド社会へのメッセージを探った。

4. 研究成果

及川は研究の成果を2018年4月に単著『アイルランド詩のナショナル・アイデンティティ The Harp & Green』(音羽書房鶴見書店、+234頁)としてまとめ刊行した。また下記の雑誌論文を執筆し、学会発表を行った。当初は2017年度にアイルランドから研究者を招聘して国際シンポジウムを開催する予定だったが、予定していた招聘者の都合がつかなくなったため、国内シンポジウムに切り替えて、佐藤亨(青山学院大学)、海老島均(成城大学)、山下理恵子(武蔵野大学)、千葉優子(青山学院大学)に、及川、三神、小林が参加して、早稲田大学アイルランド研究所の主催で、2018年1月27日にシンポジウム「アイルランドのナショナル・アイデンティティ 自由国成立から北アイルランド紛争まで」を開催した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

1. 及川 和夫「ブライアン・フリール『ルナサの踊り』論 共生・崩壊・伝承」(早稲田大学大学院教育研究科、『早稲田大学大学院教育研究科紀要』29号、2019年3月)、pp.1-16. (査読なし)
2. 及川 和夫「パトリック・カヴァナーのアイリッシュ・アイデンティティ 『大いなる飢餓』を中心として」(早稲田大学大学院教育研究科、『早稲田大学大学院教育研究科紀要』28号、2018年3月) pp.1-14. (査読なし)
3. 及川 和夫「『マイケル・ロバーツと踊り子』に見るイースター蜂起から独立戦争期のイエイツ」(早稲田大学教育学部、『学術 2017年2月研究』65号、2017年2月) pp.189-200. (査読なし)
4. 三神 弘子「予言の劇としての『サンクチュアリー・ランプ』: トム・マーフィーの宗教性をめぐって」(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、『演劇研究』41号、2018年3月) pp.1-15. (査読有)
5. 三神 弘子「アイルランドの現在とカトリック教会」(愛知淑徳大学大学院英文学会、

Language & Literature (Japan), 2016 年 12 月) pp.1-20, 31. (ISSN: 1884-7803, NII 書誌(NCID): AN10591283)。(査読有)

6. 三神 弘子「映画が物語るアイルランド—『マイケル・コリンズ』と『麦の穂をゆらす風』をめぐって—」(日本アイルランド協会『エール』35号, 2016年3月)、pp. 21-41。(査読有)

7. Kobayashi, Hironao. "Thomas Kilroy as a Brechtian: V-effects in His Adaptation of *Six Characters in Search of an Author* and in *Double Cross*." (東洋学園大学『東洋学園大学紀要』第27号、2019年2月)、pp. 13-25. (査読有)

〔学会発表〕(計10件)

1. Kazuo Oikawa, "W. B. Yeats and Walter Pater" (International Yeats Society & Japan Society of Yeats, 2018 International Yeats Society Symposium, Kyoto, Kyoto University, 2018年12月).

2. Kazuo Oikawa, "W. B. Yeats: An Irish and/or English Romantic Poet" (大石和欣(東大)・小川公代(上智大)科研プロジェクト, Romantic Regenerations Conference, Tokyo University, 2018年7月).

3. 及川 和夫「Ballad: "The Cruel Sister" 家庭内惨劇とハーブ」(イギリス・ロマン派学会「イギリス・ロマン派講座」, 日本女子大学、2018年6月)。

4. 及川 和夫(司会・発題)「Brian Friel の *Dancing at Lughnasa* に見る、1930年代の自由国の農村社会」(早稲田大学アイルランド研究所「アイルランドのナショナル・アイデンティティ 自由国成立から北アイルランド紛争まで」, 早稲田大学、2018年1月).

5. 及川 和夫「イエイツとアイルランド自由国」(日本イエイツ協会、日本イエイツ協会第53回大会、中央大学、2017年11月)。

6. 三神 弘子(発題)「北アイルランド紛争と演劇: ポスト 9.11 の視点から」 早稲田大学アイルランド研究所主催、「アイルランドのナショナル・アイデンティティ— 自由国成立から北アイルランド紛争まで」, 早稲田大学、2018年1月)

7. 三神 弘子(発題)「イースター蜂起以外の 1916 年」(日本アイルランド協会年次大会「シンポジウム: イースター蜂起: 100 年を経た今」, 青山学院大学、2016年12月)

8. Kobayashi, Hironao. "The Symbolic Meaning of the Letter Written by Blazes Boylan's "Bold hand" – How the Readers of James Joyce's *Ulysses* See Through the Hidden Meanings and Feelings behind the Text." (International Symposium: Irish Literature in the British Context—Voices from Kyoto. Kyoto University, 2019年3月)

9. 小林 広直「『ユリシーズ』第15挿話における、レオポルド・ブルームが会う父子の亡霊表象について—リポティ、ルドルフ、レオポルド、ルーディ」(日本英文学会第90回大会、東京女子大学、2018年5月)

10. 小林 広直(発題)「1922—ジョイスとアイルランド自由国—」(早稲田大学アイルランド研究所、「アイルランドのナショナル・アイデンティティ」 自由国成立から北アイルランド紛争まで」, 早稲田大学、2018年1月)

〔図書〕(計3件)

1. 及川 和夫(単著)『アイルランド詩のナショナル・アイデンティティ The Harp & Green』(音羽書房鶴見書店、2018年4月) +234頁。(査読あり)

2. 及川 和夫(共著)『知の冒険 イギリス・ロマン派文学を読み解く』(音羽書房鶴見書

店、2017年3月) pp.236-253.(査読あり)

3. 小林 広直(共著)『ジョイスへの扉 『若き日の芸術家の肖像』を開く十二の鍵』、英宝社、2019年3月) pp.111-41.(査読有)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：三神 弘子

ローマ字氏名：Hiroko Mikami

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：国際学術院

職名：教授

研究者番号(8桁)：20181860

(2) 研究分担者

研究分担者氏名：小林 広直

ローマ字氏名：Hironao Kobayashi

所属研究機関名：東洋学園大学

部局名：グローバル・コミュニケーション学部

職名：専任講師

研究者番号(8桁)：60757194

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。